

大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34
(Tel) 075-574-4118

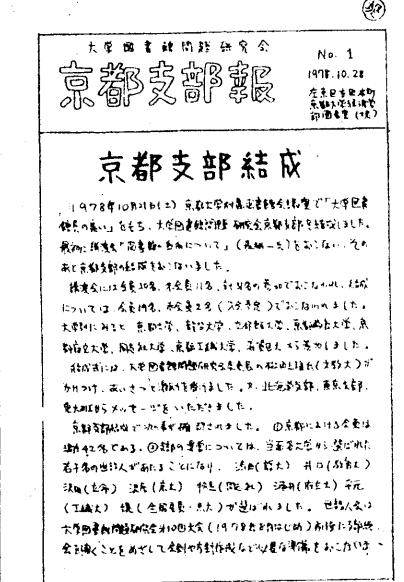
京都橘女子大学図書館 小林倫道 気付
(Fax) 075-574-4124

「支部報」創刊のころ

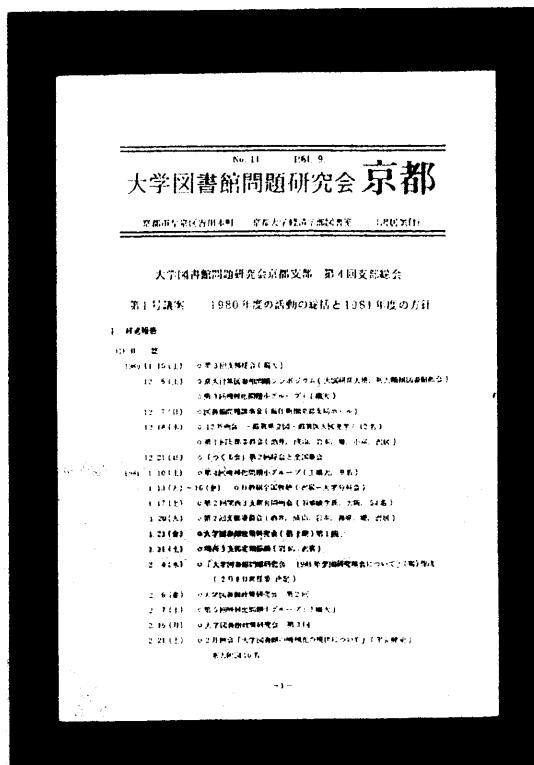
京都大学数理解析研究所 堤 豪範

支部報「大図研京都」も今回で100号をむかえ、一応、創刊号から編集に携わってきたので、初期の頃のいろいろな思い出を述べたいと思います。

1978年10月21日に京都支部が結成されると同時に、「大学図書館問題研究会 京都支部報」第1号が10月28日付で発行されました。当時は今と違ってワープロが普及していなかったので、ガリ版刷で本当に機関紙という感じのものでした。支部ができた頃は、皆が龍谷大学の「ライブラリアン・シップ」に大いに影響を受けたものです。そして、1年に1回くらいは業務を通じて経験した事や勉強したことをレポートや論文にし、とにかく自分の書いたものを印刷物にしようとはりきっていた事を思いだします。そこで、1981年6月発行の第14号からは、「大学図書館問題研究会 京都」と名を改めて、昭和堂で印刷してもらうことになったわけです。もちろん、会費も支部費として1000円徴収し、月1回の発行をめざしました。いまでは月1回の発行が定着していますが、不定期発行も何度ありました。今のようなワープロ時代ではなかったので、



目	今も気になる専門性（酒井忠志） ······	3頁
	定年後の計画（廣庭基介） ········	4頁
次	京都支部役員時代の一駒（成山雅康） ···	7頁
	学び、書き、飲んだ	頁
	大図研の十年（竹本文夫） ···	8頁
	大塚金之助と図書館思想（篠原俊夫） ···	12頁

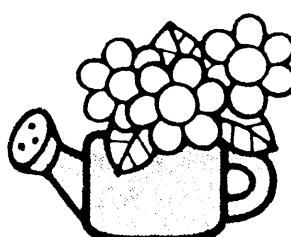


初の外注印刷号（14号）

はじめはみんな自分の書いたものが活字になると何となく嬉しくなり、原稿が知らず知らずの間に集まりましたが、しばらくすると原稿不足となり発行が難しくなった事がありました。

1981年8月の全国大会以後、大図研の常任・事務局が関西に移行し、龍谷大学の渋田さんが研究委員長になり、大図研として今までにない新しい提案がされました。それは図書館員の倫理綱領で述べられている「図書館員が専門性の要件をみたすためには、利用者を知り、資料を知り、利用者と資料を結びつけるための資料の適切な組織化と提供の知識技術を究明しなければならない。」「図書館員は常に資料を知ることに努める。」「資料のひとつひとつについて知るということは容易ではないが、常に資料を知る努力をするべきだ。」をもとに、具体的な活動方針が「資料研究」という言葉で示されました。支部報をバラバラめくってみて、当時みんながそういう意欲にあふれて活動していたことがうかがえます。

ところが、当時を思い出しているうちに、いまの自分はどうかとハタと反省させられてしましました。何となく業務をこなすことは出来るようにはなりましたが、それに流されて、図書館員として最も大切な事、変わることなくコツコツとやらねばならない事、資料研究がおろそかになっていたのです。10数年前の大図研のこの素晴らしい提案を頭の中ではわかっていても手足が全く動いていなかった事に気がつき、これからでも遅くはないとはもう言えないと思いますが、何とかガンバッテ、コツコツやっていかねばと思っていました。



今も気になる専門性

酒井忠志

私が図書館員でなくなつてからまる2年を経過した。早いものだ、とつくづく思う。その間、図書館とは縁もゆかりもない、土木事務所という正真正銘のお役所に身を置いて、建築士（多くは一級）の資格をもつ集団の専門性が、役人の世界とどう関わっているだろうかと、そのありように興味を持ち続けてきた。

土木建築行政は、国費による事業も多く、図書館とは比較にならない多額の予算を執行する。したがって、職員一人当たりの執行額も多い。

土建業者の出入りも頻繁である。営業マンが入れ代わり立ち代わり入ってきて、机に名刺を置いていく。いちいち相手をしていたのでは仕事にならない。半年も経てば、40年間の図書館生活で貰った名刺の総枚数を上回るのではないかと思うほどの量になる。聞けば、彼らは名刺の消費が少ないと具合が悪いので、適当な期間ごとに名刺の印刷を発注するという。まるで彼らの仕事は名刺配りといった感じがする。

役所では、こういうことは日常ごくありふれたこと、ことさら驚くほどのことではない。たまたま、図書館の世界とあまりに違うので、私が強い印象を受けたにすぎない。しかし、こうした環境が役所の人事を決める一つの条件であることは理解できる。今年の4月も、同一職場に2年、3年の専門職が異動、転出していった。

4月某日、宇治亀石楼における転出転入の歓送迎会に臨んだ。席上、あなたがたの仕事の専門性と役所の人事制度との間に矛盾を感じないかと、2年で転出するベテラン建築士に尋ねてみた。彼は、専門技術者の立場からすれば、若い優秀な技術者を育てるために、また、住民に本当に喜ばれる仕事をじっくり成し遂げるために、少なくとも5年は必要であると、自分の意見を語ってくれた。現場に密着したところでの判断と、現場から遠く離れたところでの判断の軽重のバランスに、なにか納得しがたいものがあるかに見えた。

このような仕事の性質と制度の違和感は、図書館ではもっと厳しく顕著に実感する。変な話だが、この実感の存在が専門性であり、その存在の否定が専門職問題であると考えれば、ことは弁証法的であるなどと、不謹慎な冗談も浮かんでくる。

図書館員と建築士を専門性という観点から比較すると、その仕事振りや、既成の制度、職域の広さ等々、さまざまな実態、条件、課題があって、単純に整理しきれないが、いずれ機会をみて誰かと一緒に検討してみたいと思う。

最近は、図書館の文献にとんとご無沙汰である。2年間も現場を離れると、勘も鈍り、まともな理解や判断は無理だと自覚している。

しかし、大図研から送られてくる資料は面白いので読む。十数年間、みんなと一緒にいろいろやった経験と思い出が、今苦労している人々が作る紙面と絡み合って、ついのめり込んでしまい、感心したり寒心したりするから面白いのだろう。『京都支部報』が100号を迎えると知らされて、とりあえず、フーンそうかと思ったが、思えば立派になったものだ。原稿を依頼されたが、昔話をしても詮ないこと、少々恥ずかしいが、近頃思ったことを記して、これで責めを果たしたことにしていただきたい。 (1993.4.12)

定年後の計画

廣庭 基介 (1993.3.31退職)

今、樹々の新緑が花のように満開である。いずれ新緑は黄緑色から濃緑へと装いを変え夏の緑になって行く。そうして又森羅万象は四季を過ごしながら年を迎え、年を送っていくのだ。花もすべて必ず散って行く。僕の京大図書館員生活にも散る時がやって来た。すべての働く人に定年退職が来るのだから、別に何ということもない訳であるが、各人が定年退職に際してそれぞれに感慨を持つことも否めない事実であろう。今のところ、僕は職場を去っても、相変わらず京大の図書館の昔のことを調べたり、書いたりすることを続けたいと思っている。自分でも知らず知らずの内にここまで続けてきたことであるから、退職したからといって、直ちにブツツンとやめる気にはならない。45年間も口に糊させて貰った職場であるし、その職場の今まで語られなかつたいろいろの事実を少しでも発掘することで、心の中で職場に繋がっていることが出来るような気がするだけでなく、職場への恩返しも多少なりとも出来るかも知れないと思うからである。

今後も調べ記録したいことは次の三つである。

1：既に殆どの京大関係者の脳裏には存在しないことであるけれども、明治32年という同じ年に発足した京都帝国大学附属図書館と同法科大学の間に、図書の利用、整理、分類等及び附属図書館の市民公開計画を巡って意見の食い違いというか、齟齬を來したところがあり、そのために、京大の図書関係の歴史上唯一の「分館」が法科大学に誕生した事実がある。僕はその両者の間に起った行き違いについて明らかにしたいのである。この行き違いについては、第3代館長であった新村出も神戸名誉教授の逝去を追悼した『経済論叢』掲載の文中で触れているし、明治37年に法科大学が発行した我が国最初の印刷歐文図書目録となった『京都帝国大学法科大学所蔵歐文図書目録』（原題はドイツ語”katalog der Freundsprachigen Bucher in der Bibliothek der Juristischen Fakultat der Kaiserlichen Universitat zu Kyoto”）の「序言」において、法科大学初代図書主任（分館長）となった岡松参太郎も触れている。僕は当時の帝国大学において、図書館の市民公開がどのように計画され、教授達にどのように受け留められていたのか、図書館長の苦悩、法科大学側の対応などを明らかにしたいと思う。

2：京大初代図書館長であった島文次郎の生涯を明らかにしたい。我が国最初の図書館専門雑誌『東壁』を編集・発行し、関西一円を対象とした図書館に関する啓蒙・研究の同好会たる関西文庫協会を発足させた人であるにも拘わらず、大学教官としては図書館長に就任したことが却って不遇を齎したように思えることと、東大の和田万吉館長と並んで、最初で最後の帝国大学附属図書館専門図書館長であった島の人となりを明らかにすることによって、当時の文化社会が如何なる人を大学図書館長像と考えていたか、大学の組織の中で図書館乃至図書館長がどのように評価され位置付けられていたのか、それは京大ではどうであったのか、といったことも一定程度解明できるのではないか、と考えるからであ

る。

島の名は地元の京大でも今日まで余り知られていない。少し前の館長など、「京大図書館の初代館長は新村出博士であると思い込んでいたので、君の論文を読んで初めて島文次郎という先生が初代であることを知ったよ。一体島先生の専門は何だったの?」と僕に尋ねられたくらいである。曾ての京大では、島の名は殊更に語ることを避けられていたようさえ思えるほどである。何故そのような扱いを受けなければならなかつたのか、という疑問から僕の関心が高まつたといえる。後に第三高等学校教授兼任京都帝国大学文科大学教授となつたから、島を不遇の人とは云えないかも知れない。しかし、明治29年東大文科大学を卒業し、同時に大学院に進んでいた島は、在学中特待生にも選ばれ、課外活動として雑誌『帝国文学』の発起人、編集委員にも選ばれ、その最初の編集室は東大に近い森川町の島の家に置かれていた。彼の専攻の英文学に關係する翻訳書や論文も発表していて、明治30年12月には創設されたばかりの京大の図書館長となる含みをもつて、「図書館の事項研究」を委嘱され、同32年11月、正式に法科大学助教授の地位を与えられた上で、1ヶ月後開館する図書館の館長に補されたのであったが、彼より5才年下で、東大を3年後の明治32年に卒業した新村出や上田敏が明治40年京大文科大学教授に任じられると同時に欧米へ留学を命じられ、同42年帰国と同時に教授に昇任したことと比較すると、島の教授昇任はそれよりも8年も遅れた大正7年のことであり、その外国留学も大正8年のことであったから、そういう意味で不遇であったには違ひなかつたのである。彼の死後約半世紀を経た今、その不遇が図書館長就任によって齎されたものか、或いは他の理由によるものか、現在の僕には調査のしようがないけれども、不遇の理由とされ得る複雑な事件が彼の身辺に起こつたことなどを明らかにすることも許される時期であると思うのである。

幸いに、僕は島が昭和3年、58才になってから結婚した模乃夫人が先夫との間に設けっていた高井一郎氏と知り合い、現在は高井氏が住まわれている旧島邸に入りすることを許されており、高井氏からも島の生涯を明らかにする作業を一緒にやろうと約束して貰っている。数年前には高井氏(今年80才)と二人で、島の生れ故郷である諫早へ調査旅行に出掛けもした。そういう訳で、退職後は是非この調査にとりかかりたい。

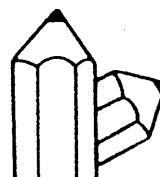
3：京大第一号司書であった笹岡民次郎の事蹟を明らかにしたい。笹岡は明治3年生まれで、小学校を卒業すると幾つかの私塾や個人教師について英語を学び、明治22年18才の時に、後に帝国図書館となる東京図書館に就職し、そこに約5年間勤務した後、明治27年東京美術学校(現在の東京芸大)に配転され、そこで図書室の開設事務に従事したようである。ところが僅か2年後の明治29年、彼は今度は仙台の第二高等学校への出向を命じられる。出向というのであるから、二高でも図書職員のポストが用意されていたものと考えられる。ここで笹岡青年は初めて書記に昇格され、所謂判任官になった。ところが彼自筆の履歴書には思いもよらない文言が挿入される。「明治29年10月29日免本官(但し懲戒)」というのである。しかも、それから1年も経たない明治30年7月14日、今度は「京都帝国大学書記」に任官する。一体これはどうしたことであろうか。本稿をお読みになつた方で、このような場合の明治期における『懲戒』の種々の意味を御存じの方は、是非御教示をお願いしたい。兎に角、笹岡青年はこうして京大に赴任してきたの方は、是非御教示をお願いしたい。

であった。

ここで、笹岡の京大着任の日付けに注意して頂きたい。明治30年7月14日というのは、京大創設の明治30年6月18日から僅か27日しか経っていない日なのである。京大最初の分科大学となる理工科大学の開講はそれより3ヶ月後の9月14日であった。附属図書館の開館はそれより更に2年以上後の明治32年12月11日であるから、笹岡が京大勤務を命じられた時にはまだその設置が決定していただけで、位置も設計も決まっていなかった。明治30年6月の時点では、初代理工科大学長中沢岩太も、書記官中川小十郎も文部省に寄寓していた仮事務所に勤務していたのであって、7月21日になって仮事務所を閉鎖した上、京都に赴任してきたのであったから、或いは、東京人であった笹岡もこの二人と行動を共にしたのかも知れない。この頃の京大の教職員は総長以下約10人くらいで、総長、理工科大学長、書記官、後に庶務課長となる人、会計課長となる人の他には書記が約5名いるだけであった。笹岡はその中に入っていた唯一の図書系の書記であったのである。

笹岡も不遇であったと云える。それは正規の教育を小学校だけで終わり、後は私塾や個人教師について英語を学んだだけであったからなのか、先に述べたように「懲戒」という履歴があったからなのか、はっきり判らないが、英語の力が相当のものであったことは、少し後に『京大一覧』の英語版を作成するに際して功績があったという理由で「金60円」の特別賞与を授けられていることからも判る。このように笹岡が図書館の開館以前から昭和11年まで約40年も勤務し、京大の洋書目録の諸制度を確立、関西文庫協会、青年図書館員連盟に加盟して、図書館学、書誌学関係のいろいろの雑誌に寄稿した上に、『欧和対訳図書館辞典』を著すなどの活躍をしたにも拘わらず、彼は遂に司書官に昇任することが出来なかつたのである。そう云えば、歴代の司書官は秋間政磨の東京外国语学校中退を除いて、すべて東大、京大の出身者で占められていた。それらのエリート司書官の事蹟でさえ、竹林熊彦以外は知る人も殆どない。僕に図書館員の手ほどきをして呉れた故谷口寛一郎司書の恩師であった笹岡司書のことを、力の及ぶ限り明らかにしたいと思うのは、不遇な司書への僕の勝手な思い入れが底流にあるからかも知れない。図書館というものは一つの建物であると同時に、文化的営為そのものであり、多くの下積みの名もない司書達の努力の総和でもあって、一人の館長、管理職者の作り上げ得るものではない。そのような意味からも、笹岡司書という一人の無冠の司書を代表に選んで取り組んでみたいのである。

僕が定年退職を迎えるに当たって、今後も大図研の一員として加盟し続ける決意であることを、上記のような計画によって表明させて頂いた次第である。大図研会員が退職後も在籍して勉強を続けることが長生きの薬になると良いなあ、などと云ったら不謹慎だと云われるだろうか。今後ともどうぞよろしくお願ひします。



京都支部役員時代の一駒

龍谷大学法学部事務室 成山雅康

京都支部が結成されて今秋で15年、一足早く『京都支部報』が100号達成の由、おめでとうございます。支部結成段階からの会員の一人として実に感慨深いものがあります。

私と大図研との出会いは、渋田氏（龍大）より『大学図書館問題研究会報』を見せられ、京都勤労会館で開催された第7回大会（1976年）に参加した時であったと思います。当時、龍谷大学では館員有志によって「図書館学研究会」が結成され（1975.10.17）、未熟ながら活動を開始していました。勤務経験5～6年の職員が50%を超え、利用者サービス改善の必要性を感じつつも、そのために何をなすべきかが分からぬままに日常に埋没している状況のなかで、図書館学研究会は個人の成長と図書館の発達を願う仲間の集いとして結成されました。研究結果発表の場としての会報『ライブラリアンシップ』の発行を開始しました。全員で確認し合ったことは、月2回の研究会参加、共同研究への参加、自由テーマによる個人研究、業務報告、月1000円の会費負担でした。今から思うと大変厳しい義務ですが、何故か研究会が待ち遠しかったことを覚えてています。

大図研が大学図書館の発達と教育研究の進展を真剣に願う図書館員の自主的全国組織として、自らの研究活動を通してその実現を図ろうとする基本姿勢に、図書館学研究会と重なる部分もあって、私はスムースに大図研に馴染んだ記憶があります。また、龍大の大図研会員が最盛期には8名を数えたのも、実はこうした下地があったからです。

私が京都支部の役員として活動したのは、第2回支部総会（1979.10.20）から、人事異動によって図書館を離れた1983年9月までです。この間で非常に印象深かったことが2点あります。その1つは、1981年全国研究集会への京都支部報告の準備過程についてです。委員を中心に「大学図書館政策研究会」を結成し、大学図書館発展と図書館員の役割に及ぶ真剣な議論を経て、発表原稿を整理しました。この研究会は通称「酒井学校」と呼ばれ、京都支部長、後の常任委員長酒井忠志氏の強力な指導のもとに進められました。月3～4日ペースで深草から京大・京都府大に「通学」すること自体大変でしたが、その上、次から次へ資料準備注文が出され、文献を探し、読み、まとめるために多忙を極めましたが、短時間でまとめるためのよい「こやし」になったような気がします。

第2点目は、1981年に常任委員会の関西移転が行われ、京都支部役員の主なメンバーが根こそぎ常任委員に平行異動したため、京都支部の役員は活動経験の浅い会員が担当することになったことです。その上、常任委員会が、「1000名規模の大図研へ」「自主的・組織的な研究活動を進めよう」「業務の日常的点検を進めよう」「研究者との協力共同を進めよう」と次から次へ檄を放つのをうけて、支部段階でどう実現するのか大いに悩んだものでした。竹村事務局長（京大）を中心にその具体化のための方策を検討実践しましたが、試行錯誤の連続でした。しかし、こうした努力の積み重ねによって京都における組織拡大や研究活動の連続でした。しかし、こうした努力の積み重ねによって京都における組織拡大や研究活動の連続でした。しかし、こうした努力の積み重ねによって京都における組織拡大や研究活動の連続でした。

1981年度だけで会員倍増を果たしています。

京都支部の基礎が固められた時期に、役員として参画出来たことを嬉しく思います。

学び、書き、飲んだ大図研の十年

同志社大学人文科学研究所 竹本文夫

1) 会員拡大運動で入会

私はそんなに古い会員ではない。十年と少し前のことであろうか、常任が関西へ移ってまもなく千人の会員をめざす運動があった。同志社で昼休に「大図研の説明会があるから来い」と誘われ、なんなく出かけて行ったら篠原氏や澤居氏から説明があった。なるほど結構な団体だなとは思ったが「これ以上忙しくなると困る」と言って断わった。すると「大図研は運動団体ではなく研究団体だからプラスはあってもそんなに忙しくはならない」と言われ、断わる言葉に窮してついふらふらと入会申込書を書いてしまった。

2) 最初に覚えた名前は竹村氏

入会以後2～3年は例会とか総会などには参加していなかった。しかし、同志社の班会だけは、昼休みであるのと私の都合も事前に聞いて開かれるので、やむをえず参加していた。

班会は支部委員会の報告が主で竹村氏はこう言っていたとかああ言っていたとかよく聞かされたものだった。だから最初に覚えたのは竹村という名前であり、何かすごい人らしい、一度会って見たいものだな思った記憶がある。

3) 苦労した最初の支部報原稿

そうこうしている中に支部報の原稿につ

いて「殆ど京大の人ばかり書いている。もっと私学の人も書く必要がある。同志社からも出せと言われている。」という報告があり、班会で一体何を誰が書くか問題になった。

丁度2～3年前に教職員組合から十年來の議論の末「図書館問題に関する答申」が出され、さらに組合によるアンケート調査も実施され、それらに基づいて要求書が当局に提出されていた。現場でも盛んに職場討議が行なわれ、開館時間延長をはじめ閲覧関係を中心に諸改善が実行されつつあった。同志社の新図書館が建築されて十年ということもあり、この機会に閲覧を中心にしてこの間の経過を振り返ってみようということになった。閲覧では会員は私のみだ。書き手は自動的に私ということになった。

毎日のように書記局へでかけ、十年間の図書館問題に関する組合の記録を調べ、中心的に関わった人達に聞き取り調査もして最初の下書きを書いた。班会でそれを議論してもらい原稿に手を入れ、さらに、組合の「図書館問題特別委員会」の責任者にも見てもらい、意見を聞くなどして原稿を仕上げた。

この原稿を書く中でいろいろなことを学んだ。まず、人間の記憶というものが如何にあいまいであるかを資料調査をしていて嫌というほど実感させられた。また、データを整理するに当たって、どの視点に立つかにより随分異なったものができる、いうことも実感した。さらに、集団討議の重要性というものが班会の討議を通してよく

分かった。人によって同じことでも随分受け取り方が違うということに驚かされたのである。

さらに原稿はたった4頁であったが、普通の雑誌のように書きき放しとは違い、班会における集団討議、支部委員会における合評（班会でその報告を聞いた）、支部総会基調報告での評価等があり、大いに励まされ、書いて良かったと思った。

最初の原稿作成で、相互に助け合い、励まし合って成長するという大図研の原点に触れ得たことは幸いであった。

※「同志社大学図書館オープン十年の歩み；閲覧部門を中心に」（『大学図書館問題研究会京都』No. 31／1984.3）

4) 勉強になった支部委員会

入会して数年たった頃それ迄支部委員だった人が誰か委員を代わってくれと言い出し、すったもんだしたあげく私が彼と交代することになった。その頃体の調子が良くなかったので、健康の許す範囲内で、また都合の悪いときは誰かが代理で出席するという約束でとりあえず1～2年ということで引き受けた。まさかその後十年も役員をすることになるとは当時夢にも思っていなかった。

支部委員会は参加してみると、いつもまず情勢の報告があり、我々のような私学のものにとってあまり知らない国立大学や文部省の動きなどが紹介された。井の中の蛙であった私は初めて全国の大学図書館状況を生々しく知ることが出来、驚くとともに大いに視野が広がったことを覚えている。

議題もはじめは討論に参加するというよりすべて勉強であった。しかし、これはただの勉強ではなく、生きた勉強であり、職

場でいろいろ物事を処理するうえで大いに役立った。

図書館の勉強をするなら大図研の支部委員をするのが一番手っ取り早いと私はいまも確信している。

5) 教員面接の取り組み

支部委員になって半年位たった頃、全国研究集会に向けて京都からレポートを出すことになり、支部委員会に竹村氏から「大学における教学を図書館員と大学教員による協力共同で発展させよう」という提案があった。その中に教員面接を行なうことによって教育研究の実態を調べよう、という行動提起があった。かねがね同志社における新館建築後の爆発的利用増加についてその基本的原因は何だろうかと思っていたので早速やってみた。

まず法学部の教員に面接をした。やってみて驚いたことは私などの想像をはるかに絶する教員の教育への取り組みのすさまじさであった。次の支部委員会で報告したところ大いに励まされ、広島での全国研究集会に報告することになってしまった。それから約一ヶ月、暇があれば教員面接を行ない、広島で報告した。

これですんだと思っていたら支部報にそれを書けと言われ、また苦しみながら法学部の先生のだけ書いた。しかし、それだけではすまされず、今度は『大図研論文集』に全貌を書けと言われ、二ヶ月もかかってそれを書きあげた。大いに苦しんで書いたが、2回書くことにより、内容をかなり深化させることが出来た。書いてまとめるということは実に大切なことだとこのとき思った。

この教員面接は、もし自分一人だったら調査も数十人はようしなかったろうし、ま

してやその全貌を活字にまとめるなどということは到底出来なかっただろう。皆から励まされたり、強要されたりしてやっと出来たというのが正直なところである。

※1 「同志社大学における教育実践；民法A教授ゼミの事例」（『大学図書館問題研究会京都』No.36／1985.8）。なおNo.38に森田富貴子氏による京都橘女子大の教育実践報告がある。

※2 「同志社大学における教育実践；教員面接調査の報告」（『大図研論文集』第13号／1986.4）。なお、同タイトルで『図書館界』vol.39-No.3(1987)、また同じく『図書館界』Vol.40-No.5(1989)に「大学における教育と図書館」。結局このテーマは4回書いた。

6) 大図研学校など継続研修について

京都支部の取り組みの最大の特徴は大図研学校以来の研修の継続的実施である。初めの頃講義に出ても何となく物足りなかつた。何千円か払って土曜の午後をつぶして出席した甲斐があったかどうか疑問にすら思った。そうは思いながらその後も支部委員ということもあり、かなり無理して都合をつけ、ずっと参加していた。そのうち物足りないと思った講義がいつの間にか私の中に沈殿し、ふと気がつくと私のライブラリアンとしての足腰を鍛えてくれて來ることに気付くようになった。

例えば大図研学校第1期後期の長沢氏のレファレンスの場合、何かごたごたしゃべっていた程度にそのときは聞いていたが、日外アソシエーツの宣伝パンフでもある『レファレンスツール Q & A』の紹介があ

ったが、そのときはそのまま聞き過ごしていた。後日ふとその話を思いだし、現物を見てみると中身は日外のものだけだが、一つ一つ参考図書の解題があり、基本的問題が5問、やや上級の問題が5問それぞれあって、それを全部自分でやると大体その参考図書の使い勝手が分かるようになっていた。これでかなり力をつけることができたように思う。近くこの改定新版が出るようなので楽しみにしている。

また、上田秋成の講義は膨大な資料をもとに土日8時間の集中講義で非常に疲れたが、元禄時代の文学状況や江戸文学の研究がどのように行なわれているかを示す内容で図書館員としては貴重な滅多に聞けない内容であった。これも後になるほどその値打ちが分かってきた。

さらに印象が残っているものとしては立命福井氏の自由民権運動の講義。当時の新聞記事などの記録を丹念に読み、集会が行なわれた場所を地図で確認しながら、京都都市部における自由民権運動の実態とその意義に迫る講義だった。資料入手の苦労話も交え、歴史学という学問の中身を垣間見せ、8時間という時間もあつという間だった。

大図研学校も第1期前期は整理関係で5回、後期は閲覧関係中心に5回というよう系統的にカリキュラムを作成、その後次第に主題知識の獲得に重点を置いて開催されてきた。開催時間も初めは90分であったが、その後大部分が土日の2日間かける8時間集中講義になってきた。そしてテーマも段々細かい専門分野に限定するようになった。こうした細かい特定分野の話を8時間聞くようになって分かったことは、話は特定分野だが詳しく聞くことによって概論では得られない深みのある知識が得られ、しかもそれはその特定分野だけではなく、

他の分野での資料探索にも応用が効く、ということであった。

どんな講義も、たとえ8時間かけてもその1回だけで、どこに、どう役立つといった速効性は必ずしもあるとはいえない。初めそれを求めた私だったが、今にして思えば、どだいそれは注文する方が無理というもの。これ一つで効くという特効薬はないのだ。やはりこつこつと気長に可能な限り参加することが長い目で見ると力をつけてくれる。全国大会や支部研究大会もこうした研修の良い機会である。

7) 大図研の人的資源

大図研が他の団体と違うのは「本音で語れる」ということであろう。京都支部はもちろんのこと全国大会等で、特に懇親会や地酒の会などで夜中過ぎまで様々な意見・情報・悩みなどが話し合われる。本音で知りあった仲間というのはすぐに親しくなれるし、物事も頼みやすい。しばしば電話やファックスでいろいろな人にお願をして迷惑をかけているが、それで今までどれだけ助かったか分からない。この大図研ネットワークは私の図書館活動を支えてくれる地下資源である。

本音で語り、互いに助け合い、励まし合う大図研だからこそこうした人的ネットワークが出来る。千人近い会員の中にはさまざまな人がおり、得意分野も様々である。この人的資源を活用しない手はない。活用するためには各種企画やイベントに積極的に参加することである。特に懇親会等一杯のみの参加が効果的だ。京都橘女子大の小林氏の話によると居合道での練習でもその後の飲み会、それも2次会、3次会と粘るほどいい話が聞けるそうである。

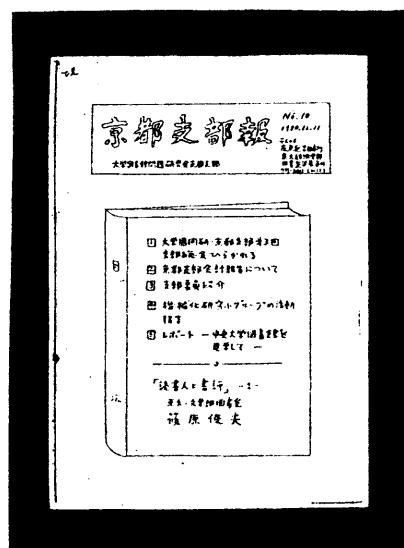
ここ数年支部委員会の後で竹村氏と一杯

飲む習慣になっていて、これが大変楽しみとなっている。取りとめのない話をしながら飲んでいるのだが、ここでの話がヒントになって結構いろいろなアイデアや企画が生れてきている。こうしたインフォーマルな場での情報や意見交換も重要である。当局が飲み会を組織するはずだ。

<おわりに>

最後は少し飲みすけの勝手な言いぐさに脱線してしまったようだが、以上のように私は大図研に入っているいろいろ学び、鍛えられ、大いに飲んで楽しんできた。

以前紫式部・源氏物語関係の書誌を作っていたが、途中から忙しくて継続出来なくなった。対象があまりにも大き過ぎたのが基本的原因だが、直接的には大図研のせいである。しかし、その代わりに得たものは失ったものよりはるかに大きい。いま悔いはないどころかむしろ大図研に誘ってくれた篠原氏や澤居氏に感謝している。今後も大図研と共に歩むつもりである。



(支部報 No. 10)

大塚金之助と図書館思想

京都大学法学部図書室 篠原 俊夫

1. はじめに

著名な経済学史家であった大塚金之助は、文献学の分野でも優れた業績を残したことでも知られている。研究に必要な資料を涉獵するために必然的に図書館についての専門的知識を身につけるに到ったと思われる。大塚の独自性は、なまじっかの学者ならとうてい到達でき得ないレベルまで、自己の文献学と図書館思想を高めたことにある。大塚ほど積極的に図書館に関わり、機会ある毎に自らの経験と信念にもとづいて発言を怠らなかつた学者は稀である。コレクションの形成という観点に限るなら、一家言のある人は珍しくない。

しかし、昭和10年代のはじめに、アメリカの先進的な図書館システムの優秀さに着目して、日本の大学図書館や研究図書館での機械化によるサービスの改善や標準化された目録カードによる総合目録の整備を急ぐ必要があることを具体的に提案したことは、大塚の図書館に関わる思想の驚くべき先進性を示している。

2. 大塚金之助の図書館観

大塚の主たる業績は、大塚金之助著作集全10巻（岩波書店）として刊行されているが、「わたしの読書遍歴」という表題をもつ第5巻には、大塚の読書と書物に係わるエッセイが多く収載されている。経済学史の専門家である以上、文献学に通じていても不思議はないが、大塚が特異であるのは、彼が一利用者の枠内にとどまらず、ついに理想の図書館の構想に向かうにいたることである。大塚は国内では上野の帝国図書館や慶應義塾の、海外ではアメリカの議会図書館や大英博物館読書室を利用した経験をつき合わせながら、日本の大学図書館の現状を把握し、問題点を指摘している。「外来者の見た大学図書館」と題するエッセイでは、「日本では、大学の教師や図書館員は多く役人である。役人を思ふと、わたしはいつもニコライ・ゴーゴリ（1809—1852年）の作『外套』が実によく当時のロシアの官吏気風を画いたを思い起こすのである。無口で厳格で規則づくめの上官は、すべて書類は先ず事務局一家長一局長一秘書の手を経て『最後に秘書が吾輩のところに持ってくるのだ』と豪然としている。（中略）かういう制度のなかで養はれた図書館員は、その人の技術や良い性格にも拘らず、やはり官僚的な気質を持ち易い。人々はそれをベルリンのプロシャ図書館の入り口や上野帝国図書館の入口に見出すだらう。」と記している。なに今でもこれに近い図書館はいくらでもあるに違ないので、大学図書館員は、放つておけば無意識に役人風を吹かせてしまいがちなものだということを忘れるべきではないというのは、わたしが声には出さず飲み込んだつぶやきである。

同じエッセイのなかで大塚は、カード目録について言及し、優れた蔵書にもかかわらず大英博物館読書室やベルリンの図書館には、カード・システムが存在せず、ワシントンのコンгрレス図書館のカードがニューヨーク公共図書館で検索できるまでに進歩していたア

メリカの図書館システムの優位性を指摘している。「カードが最も合理化され統一され規格化されていたのは、アメリカの図書館であった。ワシントンのコングレス図書館のカード部はこの図書館に入るすべての書物やパンフレットの標準型カードを印刷し、このカードには著者、そのペンネーム、生年死亡年、書物の表題、発行地、出版書店、出版年、頁数、書物のフォームの外に、レフェレンス・カードの作り方、時には各章の内容までが印刷されてゐて、アメリカの全図書館はこのカードを数枚づつ購入し著者カードやいくつかのレフェレンス・カードを使っている。」

大塚は「大学図書館」と題するエッセイを帝国大学新聞（第634号／昭和11年）に寄せているが、その中で大塚は日本の図書館が諸外国の図書館に比較して立ち後れている現実を指摘しているが、経済学の分野に限って言えば、東京商科大学はカール・メンガー文庫を所蔵している点で世界有数であること、東京帝大は、アダム・スミスの旧蔵書約300点を所蔵し、大阪商大は故福田徳三博士の文庫とゾムバート教授の文庫を所蔵していることでいずれも世界の水準に劣らないとしながらも、大学図書館の閉鎖性ゆえに、これらの豊富な研究資料に近づき得る研究家は、現状では僅かに数十人のそれぞれの大学の現職者だけであることを憂えている。公開性という意味から、当時、日本で唯一の公開大学図書館が三田の慶應大学図書館であり、入館料一日五銭で誰でも利用できること、音楽文芸から法律政治にいたるまで広範囲の蔵書に特色があり、中でも経済学文献の豊富であるとのべている。今日、大学図書館の公開がさまざまのかたちで模索されているが、当時の慶應大学がやすやすとそれを成し遂げていて、おそらく閉鎖的だったに違いない帝国大学図書館とは、まったく対照的な姿を見せていた。「官僚気風のみなぎる大学学界のなかにあって、この大学図書館だけが公開されてゐるということは、福沢諭吉以来大学図書館の社会的任務をよく理解し実行した学風の特色を示すと共に、何よりも先ず、大学図書館の公開が技術的には不可能でないことを有力に実証してゐる点で最も重要である。」

「日本ほど図書館難のひどい国は文明国のどこにもない。第一、公設図書館だけにたよってゐては、もはや今日の世界の学界の進展が十分にはわからない。今日の図書館經營が、予算、図書購入法、専門化、語学制限、思惟制限に制約されてゐるからである。18世紀イギリス農業史の研究家ラヴロヴスキーの論文は、イギリス雑誌『経済史評論』に出てゐるのは図書館でも見られるが、仏文『ソ連邦科学アカデミ一年報』に掲載されたものは図書館では見られず、まして1935年のそのロシア語の著書などはない。」

長くなるがもう少し、大塚のエッセイから引用してみよう。「旧ドイツ社会民主党機関誌『新時代』は、東京では帝大、慶應、商大の三ヶ所に揃つてゐるが大切な索引は不公開の帝大にしかないから、慶應ではこの雑誌は死んでゐるも同然である。大学図書館の封鎖は相互に資料の殺し合ひをやってゐるやうなものである。」

大学図書館の現状が当時と比較して信じられない程改善されたと考える人は少数であろう。大学図書館の公開は、今も昔も依然として大学図書館の課題なのだ。そして大学図書館の公開を困難にしている理由もそれほど変化したわけではない。

3. 大塚金之助と戦争図書館構想

大塚金之助は日本の敗戦を予測しつつ、戦争を防止するための戦争図書館と称するものを構想した。これは結局、実現されることのなかったものだが、簡単なメモ書き程度のものが残されている。例えば、人員という項目がある。これを見ると大塚金之助が専門図書館のスタッフに何を期待していたかを推し量ることができる。

- ・一般的教養水準の高い勉強家の集り
- ・life-work、厚生施設、夏休み
- ・女事務員でも勉強題目をもつこと
- ・海外の大学を出ること
- ・次代スタッフの養成にたえず注意

以上は戦争図書館の特色とかかげられた四項目中の第四項目にあたる人員に関するメモの内容の全てだが、すぐそのあとに「人間」と題するメモがあって、その内容は以下のようなものである。

- ・幹部は海外を出た人で構成する（男女とも）
- ・幹部の後継者は少なくも三年欧米に留学させる
- ・外国大学の学位を取らせる
- ・図書館学専門の人も留学させる
- ・人格、品位、趣味の高い人だけを集める
- ・語学－少なくとも二ヶ国語を正確に訳す力
- ・単なる事務員ではなく、研究的な人を求む
- ・生涯的な研究－その研究において他に比肩なきこと－どんな研究でもよい
- ・政治運動、政治思想に超然たることを要請す－違約者は辞職を乞ふ
- ・人選－厳重な試験、長年の観察

これを見る限り、大塚金之助の構想する戦争図書館のスタッフは、主題の専門家を中心を占め、図書館の専門家もいるというくらいである。

続いて「館員の待遇について」と題するメモを見てみよう。それは以下の通りである。

- ・生涯の生活を保障する
 - ・少なくとも大学の教師なみに扱う（大学教師＝本職＋内職）
-
- 一 待遇－最も大切、これによって人材を集めなければろくな図書館はできない
 - 一 金銭的－生活の保障－月給、ボーナス、物価手当、病気見舞、退職手当等々
図書館なみ（極めて貧弱）とせず、三井なみとす
 - 内職をしたりしないで仕事に熱中すること
長年在勤者の死後、遺族がこまらないようにしてやること
 - 一 休養－一日八時間制（土曜半休）
一週一日休み（日曜以外の日と交替）
一年に一ヶ月暑休（七、八、九の三ヶ月に交替）（健康回復、勉強、道楽）

できるならば山寮、海岸寮の設備

- 一 万一転職の場合のための用意一単に図書館員としてでなく
 - イ 少なくとも二ヶ国語の正確な勉強、翻訳の練習
 - ロ research workerとしての教育を施す
 - ハ 何らかのテーマを終生持つづけて研究する習性を養成する
 - 二 近代人、文化人としての品位、趣味の向上
 - ホ lover of reading
- 学校、研究所、調査部への転職の一つの可能性ができる

大塚金之助の残した以上のようなメモから、イメージされる図書館員の像は、あらまし以下のようなものになるだろう。

高い教養と趣味を持ち、三井に勤める会社員並の待遇を受け、夏は一ヶ月程度の休暇が取れ、専用の山や海の寮で保養することもできる。たぶん図書館の専門職員は日常業務に忙殺されることもなく、ある程度研修のための時間を確保できる。主題を中心に専門知識の習得に加えて、語学の勉強も怠らない。これは、図書館業務の水準を高めるというのが本来の目的だが、同時に万一の転職を想定して、つぶしがきくだけの能力を身につけさせようというわけである。大塚金之助が敗戦直前にこの戦争図書館の構想の中で思い描いた図書館員の像は、半世紀が経過した現在でも、日本の第一級の研究図書館でも実現していない。大塚のイメージする図書館員は、どこで養成されるのだろうか。推測にとどまるが戦争図書館のスタッフは、図書館学の組織的教育を受けているわけではなく、大学ではおそらく社会科学の一分野を専攻した人材を想定しているように思われる。図書館学に関する能力は、研究図書館の特殊性に応じて、採用後に在職者研修によって身につけさせる方が合理的だと考えていたかも知れない。具体的な図書館員のイメージを描くにあたって、そのモデルとなったのは、大塚金之助が海外で利用することのできたブリティッシュ・ミュージアムやロンドン大学の図書館、あるいはアメリカの議会図書館に働く専門図書館員にその原像を求めることができるよう思う。

大塚は日本の敗戦を確実に予感しながら、知的、経済的窮屈のなかで寂寥を纏すかのように戦争図書館の構想に耽ったのだろう。現実が貧しければ貧しいほど、大塚の空想は、敗戦後に実現すべき理想の図書館に向かってはてしまふくらんでいったのである。

無論、大塚の図書館にかかる思想は、時代の制約を抜きがたく受けているし、現実には恵まれなかった分だけ、空想のなかでそれを補完したいという願望が働いているように思える。それにしても、（大学教師＝本職+内職）と書き、一方で「内職などしたりしないで仕事に熱中すること」と記さざるを得なかった大塚の胸中は、複雑なものがあったに違いない。現実の貧しい図書館員の待遇をよく知っていた大塚は、「図書館なみ（極めて貧弱）でなく、三井なみに」と記さずにはおられなかった。

大塚が研究者をめざして東京商大で勉学に励んでいた頃、学者の道を選択するのは、経済的に恵まれた家庭の子弟と相場が決まっていた。膨大な資料を私財を投じて蒐集し、無用の内職などに心をわざらわされることなく、研究に没頭できたのは経済的にゆとりのある研究者のみに許された特権であった。大塚は経済的に恵まれた家庭の出でなかつた分だ

け、資料を私財によってまかなうことが叶わず、長く図書館の資料にたよって研究をすすめざるを得なかった。結果的に大塚は、よく整備され、優れた図書館員によって支えられた図書館の大切さを認識する条件に恵まれたというべきかも知れない。大学図書館の資料に頼る他ない研究者だったからこそ、閉鎖的な図書館の限界をよく知り得たと言える。従って大学図書館の公開は、大塚にとっては、単なる理念ではなく、拒絶された利用者としての経験から育まれた切実な願いであったと思える。大塚金之助著作集第5巻の解説を担当している細谷新治の記すところによれば、大塚は、大学の図書館は公開すべきであるという意見を持っていたが、あるとき、『これからは、研究所の図書館も資料に不自由している民間の研究者に公開しなければいけません』と細谷に語ったそうである。細谷は、解説の中で、大塚が治安維持法による弾圧をうけて、結果的にすべての公職につくことを禁止され強制失業者となつた時に、母校である東京商大の図書館を使うことさえ許されず止むなく、当時の唯一の公開図書館であった慶應義塾の図書館や上野の帝国図書館を使うほかなかつたことを記している。しかし、その不自由さが大塚をして図書館のあり方への本格的な考察に向かわせる契機になったと言える。

4. おわりに

大塚が図書館について現在でも刮目に値する分析を残し得たのは、大塚が研究者としては、特權的利用者から遙かに遠い位置にいて、いわば市井の一市民として、図書館を利用し、評価し、批判する立場を強いられたからである。1933年の1月に治安維持法によって特高に逮捕されてから、日本が敗戦を迎えるまで大塚は公職への道を閉ざされ、妻のささやかな収入、友人達からのわずかの援助、翻訳などのアルバイトなどによって、細々と生計を維持したらしい。そんな窮状下にあっても大塚の研究意欲と書物への探求心は少しも衰えることはなく、獄中にあっても周到な読書計画をたてて、経済学関係の専門書はもとより、文学書から語学の参考書まで差し入れを求めた。ロシア語の習得も専らこの獄中にあった期間があてられている。釈放されると輸入が途絶えたために極めて入手が難しくなった新刊の洋書への飢餓感を癪すべく、せめて古本でもという気持ちから、都内だけでなく地方の古書店まで足をのばして、めぼしい洋書を探し歩いている。敗戦後、一橋大学に復帰した大塚は、1947年から経済研究所の所長に就任し、研究所の蔵書形成に大きな役割を果たした。戦時中、大塚は厳しい弾圧を逃れるために、少なくとも千冊の和書、五百冊の洋書を自らの手で焼き捨てなければならなかつた。また折角集めた書物も生活のために手放さなければならなかつたこともある。大塚は客観的にみれば、絶望的としか見えない状況を耐えぬくことができたのは、強靭な精神力にもよるだろうが優れた書物の蓄積と公開によって、すなわち、大塚の想い描く理想の図書館の実現によって人類が開放されると信じていたからに違いない。しかし、戦争図書館の構想が実現しなかつたように、戦後の大学図書館も結局、大塚が何十年か昔に着目し、提言してきたことを未だ達成できていない。大学図書館の公開という観点から、時代を超えてなお古びていない大塚の図書館思想をあらためて見つめなおしてみたいという思いが強い。（おわり）